

スピリチュアリティ研究と高等教育 - フェミニズム理論と近代に関する諸理論からの示唆 -

恒松直美

はじめに

本稿では、現在多様な分野で研究されているスピリチュアリティの研究とその発展に関連する社会科学及び自然科学の理論について考察し、今後の高等教育におけるスピリチュアリティ研究への示唆とする。スピリチュアリティおよび意識についての研究成果及びその理論的背景と発展について考察することにより、現在スピリチュアリティの問題が学際的に研究され発展している現状を把握し、それが高等教育におけるスピリチュアリティの問題とどう関連しているかを探る。スピリチュアリティ及び意識(consciousness)¹の研究は、心理学、哲学、宗教学、神学、教育、ビジネス、理論物理学、医学、認知科学、神経科学、行動科学、進化生物学、現象学など幅広い分野で国際的に発展し、学際的に多様な分野を連携させた研究も進められている。

スピリチュアリティは、社会科学及び自然科学における諸理論の発展と密接に関連しており、生きる意味と宇宙での共存という「生」についての根本となる課題とも結びつく。また、現在異文化間の相互依存やつながりを重視するグローバル教育やホリスティック教育が注目を集めているが、それはスピリチュアリティの学際的研究の発展と無関係ではない。² スピリチュアリティの問題は、高等教育や学生支援に関する研究で最近まであまり取り上げられてこなかったという指摘があるが³、この現状について、例えば、Love and Talbot (1999)は、Palmer (1993)の論じる、西洋の伝統的アカデミズムにおける実証主義的、客観的知識を重んじる環境においては、信念・希望・愛などの問題を扱う余地がなかったという見解を紹介している。スピリチュアリティについての学際的研究は、従来の研究の枠組みの限界を認識した新たな知識構築に向けての動きであるとも言えよう。

スピリチュアリティ研究の理論的背景と近代科学

¹意識や心への科学的及び哲学的研究は目覚ましく、21世紀は脳と心の研究が最大の科学的挑戦になるとも言われている(石川・渡辺:2001:82)。「意識」という用語を使用した場合、科学的な学術的研究として捉えられる傾向があるが、「スピリチュアリティ」という用語を使用した場合、学術研究の域を超え、かなり多義的に捉えられる傾向にあり、注意が必要である。定義については、p.34参照。本稿では、「意識」(consciousness)についての学術的研究の詳細は割愛した。

² 恒松(2008a)参照。

³ スピリチュアリティの発達について、'student affairs'に関する主な学術ジャーナルである Journal of College Student Development, The NASPA Journal, College Student Affairs Journal, College Student Journal に、過去15年のうち、一稿のみ短い論文(Collins, Hurst, and Jacobsen 1987)が掲載されたのみであると Love and Talbot (1999: 361)は1999年の時点で述べている。その後、高等教育におけるスピリチュアリティの重要性についての研究は増えてきているが、アメリカの University of California, Los Angeles の Higher Education Research Institute(HERI)が2004年に行ったような大規模な実践的研究は少ない。

まず初めに、スピリチュアリティと近代科学との関連性について簡単にまとめてみたい。中村(1992: 2-4)は、多様な理論、学問、方法のなかで最もパワフルで人々の信頼を得、人類の運命を大きく変えた人間の所産が近代科学であることを述べ、私たち人間が近代科学を通さずには現実を見ることができなくなってしまったことを論じている。さらに、中村(前掲)は、自然科学をモデルにして科学性をめざしてきた多様な形態の社会諸科学は、現実とのずれを否定しがたくなり、人々の心を捉えきれなくなってきている現実を述べている。この現実、今日何かを失った虚無感を感じ、「心」と事象との関係を問い直し、スピリチュアリティの研究の重要性に注目する研究者が増えている現状と関連しているのではないかと考える。また、中村(前掲)は、社会諸科学と比較し、近代科学の中枢をなす自然科学においては、その有効性から現実や人間の経験とのずれを見ない人が多いことへの懸念を表明している。これは、日々生きるうえで経験する事象や現実の多様性と複雑さ、また未だ近代科学で解き明かされていない「心」や「意識」が、現存する知的枠組みの中では捉えきれないことについての鋭く現実的な指摘でもある。近代科学の自然観が、自然を含めた地球全体については宇宙全体と人間とのつながりといった全体的及び包括的な捉え方を無視し、自然を人間の有用性のための技術的開発の対象としてきたことにより、地球環境や生態系が破壊されたことは今日では疑う余地がなくなっている。

島薺(2007: 7)は、19世紀が進むにつれ科学が価値中立的なものとして捉えられ特別な地位を与えられてきたが、高度の先端技術と結びつくことにより、経済的利益獲得の主要な手段とみなされるようになり、「客観的な知」としての信頼性を失う傾向が強まっていることを懸念している。科学の発展によって、知の対象とした自然が改変され、地球環境の破壊をもたらし、20世紀以降は生命科学の発展によって人間が改変されるまでになった。科学が人間と「外なる自然」との調和を乱し、現在は「内なる自然」にまで土足で踏み込んでいる(前掲)という警告は、宇宙で「生きる」とは何を意味するかについての問いかけにも聞こえる。さらに、中村(1992: 2-4)は、近代科学の客観性が、主観と客観、主体と対象の分離・断絶を前提にしており、われわれと事物の具体的関係は一切無視されることを指摘している。このような、自己と世界、主体と客体、心と物の分離・切断という捉え方は、近代科学の普遍性を代表するデカルト的、ニュートン的な物理学による影響が大きい(中村 1992: 8-9)。近代科学の誕生が、ガリレオの説いた新しい知の枠組みである機械論、及びデカルトの心(精神)と自然(物質)の二元論に基づく機械論的世界観という哲学的基礎付けや、ニュートンによる仮説・実験という機械論的な自然研究の方法などによる影響が大きい(中村 1992: 20-23; 31-32; 52, 青木 1994: 269)ことは多く論じられてきた。⁴

⁴ 例えば、福岡(2007: 3-8)は、分子生物学的な生命観にたつと、生命体はマイクロなパーツからなる精巧な分子機械にすぎなくなってしまい、これはデカルトのいう機械論的生命観の究極的姿になってしまうことを述べ、生命には、機械論的生命観では説明不可能なダイナミズムが存在していると主張する。

近代科学が人々の信頼を得、説得力を持った理由として、中村（1992）は、普遍性・論理性・客観性を挙げる。つまり、「普遍性」とは、理論の適用範囲がこの上なく広いことであり、「論理性」とは、主張が明快に首尾一貫していることを指し、「客観性」とは、或ることが誰でも認めざるを得ない明白な事実として存在することを意味すると述べる。しかし、ここで中村（前掲）は、「現実」が、近代科学によって捉えられたものに限られるのか、そして、近代科学の理論によって具体的な現実が捉えられているのか、という疑問を投げかけ、「否」と答えている。近代科学による現実とは、機械論的に選択され整備されたものにすぎないのではという疑問を投げかけ、スピリチュアリティ研究の根源ともなる指摘をしている。つまり、「心」「意識」などの目に見えず測定できないものは研究の対象からは除外されがちな世界観への警鐘である。中村（1992: 8）は、近代科学の論理性の一義性について、一つの原因に対する一つの結果という単線的な因果関係を説くには適しており、それは限定された状況には成立するが、実際の「現実」は多義性を備え、その多義性は、無生物及び環境との相互関係が複雑な生命体や人間的対象では、より複雑になると述べる。西洋的なアカデミックのパラダイムにおいては、実証主義的な客観的知識に基づかない知識は敬遠される傾向にあったが、現在その機械論的アプローチの限界を現実から突きつけられていると言える。例えば、Capra (1982, 1997, 2000)は、西洋で確立され、絶対的知識とされてきた科学的理論や機械論的思考に基づいた世界観や価値観に疑問を投げかけ、東洋思想や新しい科学的理論を取り入れた世界観を提唱し、生態系や宇宙におけるつながりや全体的なしくみについて論じている。

現在、‘integrative science’ (統合科学)の分野では、意識や心についての研究と近代科学とを結びつける試みを行っている。統合科学 についての論文で、Kafatos and Drăgănescu (2007)は、‘integrative science’ という用語は Kafatos (2000)により「現実の構造的かつ現象論的側面の両面を研究する科学」について与えられた名称であると述べている。‘Integrative science’では、質的及び量的側面から認識し、物質及び意識についての理論を結び、生命・心・意識の性質への理解を深める(Kafatos and Drăgănescu 2007)。現在、意識と事象の関係と宇宙におけるその統合とつながりについての研究が発展し、多くの研究者に影響を与えているが（前掲）、脳・心・意識の現実についての科学的説明は科学の最後のフロンティアであるとの見解(Rose 1999)にも言及しており、現在人類が直面している「心」への科学の取り組みの複雑さと新たな挑戦について認識することができる。⁵ このように、これまで近代科学的な見解を重要視するあまり、軽視されつつもその重みを見失いきれない「心」の問題、そして心と事象との関係について、多様な学問領域がその重要性を認識し、学際的に向き合う状況が生まれているといえる。前述したように、スピリチュアリティの研究は、現在、社会科学の分野のみでなく、近代科学の中核をなす自然科学の分野でも研究が発達してきており、もはや、「心」・「意識」・「スピリチュアリティ」

⁵ P.25の脚注1も参照。例えば、Bauer (2001) と Hines (2003)の論ずるような、疑似科学と科学の違いについては認識している。

の研究は、すべての分野に関わるといっても過言ではない状況にある。この状況下、科学も含めた多分野で見られるスピリチュアリティの研究は、意識と事象についての研究の限界へ挑戦し、科学のフロンティアを越えて宇宙のつながりの中で「生」の意味を模索する試みともいえる。

知識構築についての諸理論とスピリチュアリティの研究

次に、スピリチュアリティ及び意識の研究の発展と社会科学及び自然科学の知識構築に関する諸理論との関わりについてまとめることにより、スピリチュアリティの研究と人間の作り上げた「知」との関連について考察する。スピリチュアリティの多分野における研究の発展は、「近代」についての諸理論とも密接に関係している。「近代」と知識構築に関する理論として、ポストモダニズム、構造主義、ポスト構造主義、フェミニズム、ポスト・コロニアリズム、カルチュラル・スタディーズなどの諸理論が発展してきた。男性中心主義的な視点への批判、西洋の視線に基づいて自己を規定することについての批判、統一国家や規定された文化を中心とした見方への批判など、これまで自明とされてきた主体と客体の関係への批判的見解が出されたことは、従来の知識構築のあり方へ疑問を投げかけることとなった。これらの諸理論とスピリチュアリティの学際的研究の発展は、「近代」について見直し、従来の知識構築の方法に疑問を投げかける意味で、共通する課題を含むものであるとも言える。

では、西洋が作り出した知識、近代科学、国家制度についての批評であるカルチュラル・スタディーズ、フェミニズム、及びポスト・コロニアリズムについて考えてみたい。従来の知識構築の枠組みをはずし、新しい視野からの研究が求められるスピリチュアリティの問題は、これらの諸理論の発展ともつながっており、ここでまとめておきたい。カルチュラル・スタディーズは、フェミニズムとポスト・コロニアリズムとも深く関わりあっている。カルチュラル・スタディーズとポスト・コロニアリズムは重なり合う部分も多く、共通点として、知識の生産における西欧中心主義を問題視したこと、構造主義とポスト構造主義の影響を受けていること、マルクス主義の階級中心主義を批判し、人種やジェンダーなどの階級以外の問題を全面的に取り上げたことが挙げられる（上野・毛利 2000: 154）。カルチュラル・スタディーズが問題にしてきたのは、知識の生産における権力の問題であり、その権力が、中立的でなく大学制度の外側にある政治や歴史と関連した力関係を反映していることを問題としている（上野・毛利 2000: 84-85）。これは、フェミニズム理論が問題視する、知識構築が白人男性によって行われ、有色人種や女性にアクセス権が与えられていなかったという事実とも関連する。

フェミニズム理論は、科学・学術で自明とされた客観性と普遍性を問題視し、学術理論を構築した担い手の世界観・人間観の基礎となってきた男性中心的な枠組みを批判し、私的経験の持つ意味を浮き彫りにした（湯浅: 2003: 232-235）。また、フェミニズム理論は、近代諸科学における深層心理的な構造及び社会経済的背景をえぐり出し、技術と経済的効率性の権威によ

って権力を手にした近代科学を問題視し、白人男性中心的及び西欧中心的な発想が近代の諸文化圏にもたらした問題を鋭くついた(Hunter 2002)。⁶ その結果、自明のこととされてきた西洋の男性中心主義的知識体系が疑問視され、知識構築の主体と対象について批判的な分析がなされるようになった。例えば、具体例として、Hunter (前掲)は、人種と民族についての授業において白人男性の視点・スタンダードを中心から外す(‘decenter’)重要性を論じている。白人男性の人種に対する認識は、人種についての一般の言論を支配しており、言葉に表現されない隠れた知識体系(‘unspoken knowledge systems’)であると Hunter (前掲: 252)は論述する。さらに、何世紀にも渡り高等教育で支配してきた白人の知識支配の解体は容易ではなく、知識構築における認識の背景と枠組みを理解し、それ以外の視点から知識構築する重要性を説いている(Hunter: 前掲: 272)。

西洋中心的発想により、自然は人間により管理され、ジェンダーの固定化が促進され、科学は合理性と経済的効率という権威のゆえに現実を定義する権力を手に入れた(湯浅 2003: 232-235)。科学への絶対的信頼は、「男性＝文明/文化・合理性・精神性」、それと対照的に「女性＝自然・非合理性・感覚性」という図式を定着化し、正当化した(前掲 2002: 234)。このような二分化した思考は、すべての事象に対する捉え方にも反映されているといえよう。ジェンダー研究は、女性を知識から排除することを疑問視し、力と知識構築についての討論をするスペースを作り出した(Lather: 1984: 54; 1995: 292)が、知識構築における主体を問題視したことは、従来の知識構築における力関係について重要な疑問を投げかけた。

さらに、フェミニズムにおける女性の連帯(sisterhood)は可能かという課題は、男女の二項対立のみの力関係ではなく、民族・文化・階級などの要素による多重な支配の関係と知識構築における力関係をも浮き彫りにした。これらの従来の知識構築についての批判的見解は、スピリチュアリティの研究においても焦点となる、「知識」とは何かという問題とも関連する。正当な知識は近代科学的枠組みにあてはまるもののみなのか、その近代科学的枠組みは誰が構築し使用しているのか、合理と非合理の二分化によってのみ事象は捉えられ、感覚からの知識は副次的なものとしてしか捉えられない、もしくは、その存在を認められないのか、といった疑問は、スピリチュアリティの研究における「意識」「直観」「感覚」による人間の知覚と事象とをどう捉えるべきか問う問題ともつながる。また、「近代」への批判的見解は、人々のスピリチュアリティの重要性への理解を切望する声や後述するエコロジカル・フェミニズムの指摘とも関連する。

現在、近代科学の枠を越え、新しい視点からスピリチュアリティ、意識などの問題について研究が進められている。例えば、2007年8月に‘Consciousness in Action’と題してアメリカで

⁶ フェミニズム理論と近代科学批判については、例えば、青木(1994)、恒松(2008a: 31-32)、Easlea(1990: 59-71)参照。

開催された Institute of Noetic Sciences (IONS)⁷の学会に参加する機会を得たが、意識・スピリチュアリティ・科学の最先端の研究について多様な分野から学ぶ機会を得た。IONS は、個人と共同の変革のための意識と経験についての科学的研究を推進することを使命とし、認識・信念・意志・直観力等を含めた意識の可能性と効力について研究を行い、近代科学の枠組みに捉えられず意識・スピリチュアリティ・科学の最先端の研究を進めている。⁸ IONS について注目すべきは、1) 因習的な科学的モデルにあてはまらない現象について探求し、なおかつ科学的論理に基づいた研究を行っていること、2) 多面的な研究方法による洞察に基づき、社会的及び科学的事象についての多様な見解を支持していく、と掲げていることである。自然科学と社会科学の多様な分野からの研究者が携わる学際的研究は注目に値する。

さらに、教育の分野も含め、スピリチュアリティとは無関係と思われがちなビジネス、マネジメント、経済などの分野においてもスピリチュアリティの重要性の研究が進められているのは興味深い。Wheatley (2006: 157-158) は、新しい世界観が複数の学術的分野や世界の様々な場所で同時に現れてくる興味深い現象について述べ、多くの学問分野が、異なる声で、ネットワーク、関係性の重要性、人生の包括的理解について敬意をもって考えることを提唱していると指摘する。さらに、Wheatley (前掲: 158) は、科学とビジネスには類似した概念があり、新しい世界観の表現において科学者とビジネス関係者が使用する言語に類似性があること、また科学とビジネスが生活システムの理解において共通に自然を師としていることに触れている。

また、経済学の分野においても、人と人、人と地球を結ぶ思いやりの経済学が提唱されている。Eisler (2007a) は、より良い人生と世界を作るためには、人と自然を大切にし、本質的な人間的労働資本(‘human capital’)に価値をおく新しい経済、つまり「思いやりの経済」(‘caring economics’)が必要であると主張している。Eisler (2007b)は、従来の経済学では、支配とコントロールを基本とした生産性のみが経済指標として使われ、家庭やコミュニティでの無報酬労働や自然経済などの、人生を持続させる基本である、人や自然を思いやる行動(‘caring and caregiving’)が生産活動に含まれていないことへの懸念を表明している。そして、子供、健康、平和などのための女性的(‘feminine’)ケアを評価しないバランスの欠如したジェンダー概念に基づく無意識的な価値観が経済システムで機能している現状を述べ、人間資本を基にした新しい経済システムの構築の必要性を説いている(前掲)。このように「近代」「ジェンダー」「自然」「ネットワーク」「思いやり」「人」などの概念が多様な分野で知識構築の枠組みに疑問を投げかけ

⁷ IONS については、学会の公式ホームページを参照。また、1999 年より、アメリカの Santa Fe にて ‘International Conference on Science and Consciousness’ と題した会議が毎年開催されている。アメリカ・アリゾナ州のツーソンでは、1994 年から隔年で Toward a Science of Consciousness と題した学会が開催されている(詳細はアリゾナ大学の Center for Consciousness Studies のホームページを参照)。現代科学についての論議や新しい統合科学などについては、例えば、Capra (2000, 1997, 1982), Kafatos (2000), 中村(1992)、恒松(2008a)参照。

⁸ IONS 参照。

ている現状がある。

ここで、フェミニズム理論における「自然」に関する議論について考察してみたい。エコロジカル・フェミニズムは、人間による自然の支配と男性による女性の支配は、近代社会を支える男女の二項対立思考に起源を持つという概念に基づき、人間と自然・男性と女性の新しい関係を求める思想として1970年代から1980年代に発展した(松本・金井 2004: 58)。エコロジカル・フェミニズムの思想は、西欧を中心に発達した人間による自然の征服に基づいた近代社会への批判でもあり、人間と自然との関わりを重視する点では、スピリチュアリティの研究やホリスティック教育とも関連する点を持つと言える。例えば、青木(1994: i-v)は、エコロジカル・フェミニズムについての考察において、構造的矛盾を問わず男性型社会への女性の参入をめざしてきた近代主義フェミニズムの主張により、近代社会(産業社会)の内包する差別と暴力の構造を捨象してきたことへの危惧を表明している。

しかし、近代化による「男性＝文明/文化・合理性・精神性」対「女性＝自然・非合理性・感覚性」という図式における女性蔑視についての批判から、単純に「女性＝自然・非合理性・感覚性」を賞賛する方向に議論を持っていくことには注意が必要であると考えられる。エコロジカル・フェミニズムの主唱者の理論は単一ではなく、例えば、カルチュラル・フェミニズムは、この男女の二元論的ジレンマの克服方法として、その解体でなく、資本主義的開発や近代科学・技術を価値の中心におく男性文化を問題視し、自然と女性の新しい精神的結びつきを強調した「母性主義」「女性原理」派的考えを打ち出した(奥田・秋山・支倉 2003: 280-282)。⁹ これに対し、ソーシャル・エコフェミニズムは、女性の自然との同一視や、女性の優位性に対し疑問を投げかけ、直観や感性を持つ女性を環境を癒す主役とするようなエコロジストへの警戒も表明し、さらに、女性原理・男性原理は生物学的特徴に基づく本質的なものではないとし、男性と女性の文化と自然という境界線を打ち破ることをエコフェミニズムの役割としている(前掲)。このようにエコフェミニズムにおいても女性と環境・自然との関わりについては異なる見解がある。筆者は、「文明/文化」対「自然」についての議論を「男性性」「女性性」のあり方自体とは結びつけず、「文明/文化・合理性」に「自然・非合理性・感覚性」を対峙させ科学的でなく劣ったものとする見解の問題性についてのみ触れておきたい¹⁰。現在、実証主義、立証、客観性、西洋的推論といった、普遍性の真理によって支えられた諸原則を疑問視する動きもあり、それらの研究とここで挙げたようなエコロジー思想には関連性があると考えられる。

⁹ 「男性原理」の特性として、社会を支配する文化、理性、能動、競争的要因があげられ、「女性原理」の特性として、直観、自然、受動的、平和的原理があげられ、女性原理は、男性原理の補完的、従属的原理とされていると奥田・秋山・支倉(2003: 281)は説明している。日本では、「女性原理」の解釈をめぐる「エコフェミ論争」があった。「女性原理」の復権による環境問題の解決と女性の解放を目指そうとした青木やよひと、エコフェミニズムによる前近代の賛美や女性原理を批判する上野千鶴子の論争があった(奥田・秋山・支倉 2003: 281, 284-285)。

¹⁰ 精神性は概念が不明瞭になりやすく、また、「男性性」・「女性性」との関連ではより定義に注意が必要である。したがって、ここでは含めない。

大学制度における「知」の生産と学生の教育

「教育」におけるスピリチュアリティの問題は、長い間議論されてきた問題であると同時に、厳格に専門分野に分割された伝統的な大学制度の中では、取り込まれにくかった問題でもあることが懸念される。大学という伝統的な理論の枠組みを重視するアカデミズムの環境の中で、知識構築に関して生じる力関係も、学生のスピリチュアリティへの渴望と関連している可能性がある。例えば、カルチュラル・スタディーズからの示唆は大学制度と高等教育における学生のスピリチュアリティの問題について考察するにあたり学ぶ点が多い。知識生産における権力の問題や、大学制度の外部の政治的・歴史的関わりの中での力関係の反映についてカルチュラル・スタディーズが問題にしてきたが（上野・毛利 2000: 84-85）、この点は、大学の重要な使命の一つである知識構築と教育に携わる研究者が絶えず認識しておくべき事項であろう。

大学のアカデミズムとディシプリンという伝統的な大学制度における知識の普遍性と周辺化の問題や権力の再生産（上野・毛利 2000:83-84）の問題は、現在求められている大学の変革とも結びつく課題である。以前は高等教育にアクセスできなかった学生が、一方的に教えられる知識だけでは自分たちを取り巻く問題に対処できないことに気づく状況が作り出され（前掲 2000: 88）、それらの学生が高等教育機関にアカデミックに携わることによりそれを公に表明できる場ができたことによって、従来で生み出された「知」及び学生と教員との力関係についての批判的見解が出てきたことは、大学教育にも影響を与えてきた。

知識の縮小化は、専門的能力を持ったプロの知識人が、知識を持たない大衆に「教える」、という知識人の再生産と未熟な大衆の再生産という図式から起こる（上野・毛利 2000:85）。このような状況の中、伝統的アカデミズムに対して、知識の対象と主体との関係や教育制度を問題視する動きから、新しい知識構築の概念を生み出す動きは多様な形で現れてきた。イギリスのアカデミズムにおける労働者階級の流入、アメリカの高等教育における非西洋人の著作への注目、教育のグローバリゼーションに伴う非先進国からの学生の先進国の高等教育機関への留学、フェミニズムの隆盛による女性の高等教育への進出（上野・毛利 2000:87-88）などは、その例である。さらに、周辺へと追いやられ、「普遍的知識」と隔離され、知識を記録するメディアへのアクセスのない人々の持つ知識の位置づけについて考える時、知識とは何かについて問い直す機会を与えられる。スピリチュアリティの問題は、客観的・合理的思考に重きをおく近代科学的枠組みへの疑問や知識構築における力関係のなかでの学生の自信喪失と虚無感とも関連し、「知」の意味と「知」を教える・学ぶとは何を意味するのか、という「教育」の意味の問い直しにつながる。

現在、「知識」とは何かが不明瞭になりつつある。アカデミズムの中で作り上げられる「知識生産」過程を経ない「知識」が、簡単かつ敏速にネット上で時空を越えて普及することが可能になった。「知識」とは何か、どのようにその知識が得られたのかを必ずしも分析しない大衆

によって、自由に知識が生産され、共有され、利用される時代となった。つまり、アカデミズムで確立された手法を必ずしもとらなくとも、「知識」は容易に時空を超えて提示され、人々に信憑性のある知識と受け取られることは日常茶飯事となった。確かにアクセスは簡単になったが、生産された「知識」の妥当性や正当性についての批判的分析を必ずしも行わない人々が、提示された知識をそのまま鵜呑みにする危険性は計り知れない。情報手段としてのインターネットの普及により、何が正当な知識で何がそうでないのかの判別もされない状況に陥り、大学で生産される「知」の価値が薄れている感もある。このような現状において、上野・毛利(2000:85-86)の論じる、知識の縮小再生産によって日本の人文社会系の大学教育が陥っている機能不全という問題は、教育のあり方の見直しと知識構築及びその普及についてのさらなる分析の必要性を迫るものなのかもしれない。

日本の高等教育における学生のスピリチュアリティ：日本の文化・制度

日本の教育におけるスピリチュアリティの問題を考えるにあたり、「道德教育」についての研究との関連について考察してみたい。山崎・加藤(2005: 141)は、道德性の育成と知識の習得との結びつきについての認識の重要性を説いている。道德教育と教科教育とは密接に関連し、私達が知識や技能を客観的なものとして捉え、そこに感情や意欲が介在しないと考える傾向にあるが、知識・技能の習得と学習意欲との密接な関係は広く指摘されてきたのである。1996年の中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第1次答申)」において「ゆとりのなかで生きる力をはぐくむ」という提案が示され、それに基づいた「学習指導要領」が告示された(山崎・加藤 2005: 143)。この「生きる力」¹¹とは、知育・徳育・体育の教育の三要素に対応するものであり、その核として位置づけられる豊かな人間性、生命への畏敬、公正、社会貢献、自立心、他者との共生などの概念は、教育におけるスピリチュアリティの問題と重なり合う点が多い。

例えば、アメリカの University of California, Los Angeles の Higher Education Research Institute(HERI)が 2004 年に 150 大学の 9 万人の学部生に行った高等教育のスピリチュアリティについての大規模な実践研究(HERI 2004a)からは、学生がスピリチュアリティについて渴望している姿が浮き彫りにされている。調査結果は、スピリチュアリティの問題がこれまであまり重要視されてこなかった現状を提示し、高等教育におけるスピリチュアリティの問題が学生及び職員の「生きること」の根幹に関わる問題として無視できないことを明らかにしている。¹² 日本でも小規模ではあるが、大学生のスピリチュアリティについて調査が行われ、理論的にも

¹¹ 1996年の中央教育審議会答申で示された「生きる力」についての詳細、及びその後の「学習指導要領」改訂の指針については、山崎・加藤(2005: 143-156)参照。また、中央教育審議会の答申については、ホームページ参照。

¹² HERIによる調査結果の詳細については本稿では割愛する。学生のみでなく職員のスピリチュアリティについても調査が行われており、分析結果が論文でも公表されている(HERI 2008)。

発展してきている。安野・亀田(2006)も指摘しているように、「高等教育におけるスピリチュアリティ」は、アメリカにおいては長年にわたり研究されているテーマであるが、日本においては、まだ十分に発展していない状況にある。ホリスティック教育の発展とその見解を取り入れた教育についての考察は見られるが¹³、大学生のスピリチュアリティについての実態調査や、高等教育とスピリチュアリティについて直接論じた論文は多くない。スピリチュアリティという捉えにくい概念¹⁴と、論じ方によっては、学術的及び科学的でないといえられがちであることが、学術的な調査及び研究に取り上げられにくいことにも影響していると考えられる。日本の研究では、例えば、安野・亀田(2006)が行った、HERI 作成の調査票(HERI 2004b)を基にした、女子短期大学のスピリチュアリティ調査がある。¹⁵アメリカの大学生と日本の大学生の考え方の違いについても言及しており、「日本」の高等教育における学生のスピリチュアリティの特性を明らかにすることの重要性を示唆している。文化的・社会的・制度的要因による学生のスピリチュアリティへの影響、及びジェンダー概念による影響についても今後実践的研究が必要となろう。

次に HERI が行った UCLA の学生のスピリチュアリティについての調査と、安野・亀田(2006)が行った日本の女子短期大学の学生のスピリチュアリティの調査に基づき、調査結果に現れた相違について簡潔に述べてみたい。相違が現れた理由として、アメリカと日本の文化的要因でなく、4年生大学と女子短期大学という相違に原因がある可能性があることにも留意する必要がある。まず、安野・亀田(前掲)は、行動力における差を挙げている。その理由の一つは、ボランティア活動への積極性の違いである。アメリカの学生の場合、大学出願にあたりボランティア活動の経験等が「人物評価」となることがあるため、多くの学生がボランティア活動に従事している。日本の学生の場合、ボランティア活動に従事する機会が少ない要因として、受験事情により、アメリカと異なり、ボランティア活動をカリキュラムの一貫として取り上げることが少ないこと、また、高校2年の終わりから受験体制に入るためボランティア活動などの活動に従事する精神的及び時間的余裕がないことを挙げている(安野・亀田 2006: 40-41)。もう一つの理由として、安野・亀田(前掲)は、日本の学生の「受身の姿勢」を挙げている。

¹³ 例えば、中川(2005)、日本ホリスティック教育協会(2005)を参照。

¹⁴ スピリチュアリティの定義の難しさや日本語とのそり合いの悪さ、その多様性と学際的研究については、例えば、恒松(2008a)を参照。‘Spirituality’の定義について、Tisdell (2003: 28-30)は、「世界における人生の意味と目的探求、全体における他とのつながりや事象の流れにおける真の自己探求についての認識と自己実現」と定義している。Lindholm and Astin (2006: 64)は、人生の方向付け、人生の目的、人間の存在を超越した力とのかかわり、世界とのつながり、生の全体性など(Love&Talbot, 1999; Hill, Pargament, Hood, McCullough, Swyers, Larson, & Zinnbauer, 2000; Zinnbauer, Pargament, & Scott, 1999)を挙げている。

¹⁵ 調査は、2007年7月、創価女子短期大学の現代ビジネス学科を履修する1年生を対象に実施された。配布部数178部のうち、有効回答数は72部で、回答者のうち19歳が65%、18歳が15%、20歳以上が20%であったと報告されている。2年間の教育を通しての学生のスピリチュアリティの変化を探求することにより、「スピリチュアリティを育む教育」の実践内容を思考することを目指し、将来的により幅広い学生に定期的に調査を実施するための予備調査としてこの調査が行われた(安野・亀田 2006: 25-28)。

つまり、人や世のために役立ちたいと望みながら、何から始めてよいのか分からないのである。この状況にある学生の支援は、どうあるべきであろうか。安野・亀田（前掲）は、アメリカの高等教育におけるボランティア活動（community service）やサービス・ラーニングについての先行研究に言及し、「取っ掛かり」の機会を大学が提供することの重要性を提案している。先行研究（Bischetti 2001; Rhoads 1997; Serow 1990）によると、これらの活動が学生の精神性¹⁶や宗教性にポジティブな影響を与えていることが提示されている。安野・亀田（2006: 41）は、このような社会活動面での「実践的な体験学習の場」を提供することによる「社会性と国際性に富む学生」の育成を提案する。¹⁷

さらに、学生の行動力と関連して、学生が高等教育在学中に感じる「虚しさ」について取り上げてみたい。尾崎（2005: 79-80）は、大学教養課程におけるスピリチュアル教育プログラムの研究において、メンタルヘルスのカテゴリで問題として取り上げることは少ない、「むなしさ」という実存的危機に関わる感情について取り上げ、その感情を持っている学生が多いという諸富（1997）の研究を紹介している。必ずしも病理的な現象としては捉えられていなくとも、見逃してはならない学生のメンタル面の問題についての指摘である。尾崎（2005: 80）は、「スピリチュアルヘルス」の概念と「メンタルヘルス」の概念との区別について論じ（尾崎 2001; 尾崎 2004）、心理的（メンタル）と異なる意味の言葉として、Frankl(1967)が述べた、実存に関わる精神の能動的な働きを表す‘noetic’という言葉について論じている。生きている意味や命に関わる概念として、神秘的及び宗教的なものと区別するために、この表現を使用したことが説明されているが、‘noetic’という言葉で表現される概念こそ、学生による自己の生きている意味の模索と深く関わると考える。¹⁸

また、安野・亀田（2006: 37-38）は、「精神性の高い学生の方が、社会を変える一人の力の可能性について前向きであり、楽観的な人生観をもつ傾向にある」という調査結果を提示しているが、これは、スピリチュアリティが、学生の「生きること」への態度と密接につながり、社会に貢献し生きる意味を見出す行動につながることを示している。学生が将来の人生観を形成する重要な時期となる高等教育において、いかにスピリチュアリティが重要であることを示している。さらに、精神性の高い学生の方がより生命の尊さに敏感であるという調査結果は、精神性が「生命の尊厳さ」「生命の神聖さ」を感得する能力、または感受性と定義されていること

¹⁶ スピリチュアリティの訳語のひとつに、「精神性」があるが、ここでは、安野・亀田（2006: 37-38）の使用する「精神性」を用いた。

¹⁷ その意味では、広島大学短期交換留学（HUSA）プログラムにて2003年度より毎年開講している「HUSA インターンシップ」コースは、1年間広島大学に交換留学する留学生に、企業及び官公庁での実践的な体験学習の場を提供する貴重な授業であるといえる。詳細は、恒松(2008b)参照。

¹⁸ 宗教的なものと混同されることの多いスピリチュアリティの概念の定義の難しさと重要さを再考させられる。スピリチュアリティと宗教の区別については、例えば、中川（2007: 139-164）、Lindholm and Astin（2006: 2）を参照。「スピリチュアリティ」の標準化とWHOによる健康定義におけるスピリチュアリティについての議論は葛西(2003: 123-159)参照。

を裏付けていると安野・亀田（2006: 37）は論じる。

考察と今後の課題

スピリチュアリティの研究において、宇宙における人間存在とすべてものごととのつながりは重要なテーマの一つであるが、宇宙における普遍的な人間存在の意味について認識することが「生」の意味への気づきになるのではと考える。高等教育においても、学生がスピリチュアリティを模索し、生きがいを求め、日々、世界とのつながりを求めていることは前述した HERI の調査結果からも明らかである。これまで、スピリチュアリティの問題を万人共通の問題として普遍的に捉えた研究が多くなされてきたが、普遍的に捉えた「生」「人間」「意識」についての科学的探究は近代科学の枠を超えて今後も発展していくと考えられる。

また、各個人が自己のおかれた社会において文化的・社会的・制度的影響を受けながら生きるうえで、その影響と人間としての普遍的な要因とがどう絡み合いながらスピリチュアリティの問題に影響を与えているかについての考察が今後は必要となろう。例えば、日本の高等教育における学生及び職員のスピリチュアリティを理解するためには、日本文化や制度的要因から受ける影響の分析も重要となる¹⁹。近代化による自然との断絶の問題についての指摘は既に述べたが、例えば、日本人の自然観という観点からその断絶の意味するものについて考察した議論がある。半田（2007）は、日本文化の精神的土壌と「風土」について考察し、日本人のスピリチュアリティとモラルの関係を、自然観・生命観から捉える試みを行っている。半田（2007: 35）は、それぞれの文化や宗教における固有の心性は、その自然観や生命観・風土に根ざしていると論じているが、そうであるとすれば、高等教育における学生のスピリチュアリティの考察において、近代と科学、自然との断絶と日本文化の影響による自然観・生命観がどのようにスピリチュアリティに影響を及ぼしているかについての考察も重要となる。

半田（2007: 35）は、「スピリチュアリティは知識によってではなく、体験によって真に自覚され得る」と述べているが、この言葉は、教育現場にいる者に、学生の魂の覚醒と教育の意味を再考させるものである。高等教育におけるスピリチュアリティの研究において、実際に学生と職員のおかれている現実的状况を把握し、学生の「体験」について焦点をあてる研究の重要性を認識させられる。日本の文化・社会や制度による学生及び職員のスピリチュアリティへの影響の考察は、HERI が行った高等教育におけるスピリチュアリティについての実践研究などに新しい側面からの分析を加えることとなると考える。

科学を含め多分野で日々発展している意識についての研究は、高等教育の制度における知識構築の枠組みの分析に新しい視野からの示唆を与える可能性を持つと同時に、高等教育での教員と学生との関係や、アカデミズムとそこで学び研究する学生との関わり、生きることにつ

¹⁹ これは、必ずしも日本文化のみが他の文化と比較して特有であることを意味するものではない。日本人論についての批判は、杉本・マオア(1995)、Mouer・Sugimoto(1986, 1989)を参照。

いての模索についても新しい見解をもたらす可能性をもつと考える。大学の文化を創るスタッフと自分の未来を築く過程にある学生とは日々交錯し絡み合うネットワークの中で互いに影響し合っている。学生及び職員の新しい気づきは、心と事象との関わり、複雑な現実の多面性についての研究が発展する中で、大学に変革をもたらすきっかけともなる。

近代とグローバル化に関連する問題として、情報手段としてのインターネット(IT)の急激な発達や科学技術文明の発展による環境問題及び人間疎外の問題は今日しばしば指摘される(半田 2007: 35)。自然及び人間の対立と隔絶、人間同士のつながりの希薄化、つまり生命的な関係における疎外が生じ、「生命」の連続性が失われつつあることへの懸念(半田 前掲)は、今スピリチュアリティの問題がここまで多様に研究されているかへの答えの一つであるようにも思う。自然の対象化による全体的な生命のつながりへの悪影響についての度重なる警鐘は、ホリスティック教育やスピリチュアリティの研究でしばしば触れられる宇宙のつながりにおける生命への畏敬の念の表明でもあるように思う。

終わりに、グローバリゼーションが進行する中、それが文化・文明が遅れ自然に近いと見なされた対象への搾取や抑圧として機能していることの危惧(松本・金井 2004: 59-60)を紹介しておきたい。このような構造において先進国の女性たちと搾取された国々の女性の間には連帯よりも利害の対立が存在することもフェミニズムにおいて指摘されてきた。こう見てくると、スピリチュアリティに関しては、自然における命の尊さ、地球・宇宙レベルでのつながり、エコロジーの議論での人間(男性)対自然(女性)の図式における本質主義についてのフェミニズムの議論、自然に近いと見なされ抑圧の対象となった第三世界、といった「自然」・「世界」・「宇宙」・「人々」を取り巻く多様な方面からの「個」と「全体」についての論議が浮かび上がってくる。スピリチュアリティの問題は、まさに「命」「生」「地球」「宇宙」をとりまくグローバル的視点と個々からの視点とが絡み合う中で、人間の普遍性・文化とは何か、「生きる」とは何か、「つながり」・「個」とは何なのかを問い直す試みでもあるのである。その意味で「受身的な研究対象として捉えられがちな学生を「主体」として捉えた「学生のスピリチュアリティ」の調査が大規模に行われたことの重要性は大きい。複雑な現実の中で生きる学生と職員もまた、地球での自分の生き方を日々探索しているのであり、その個々のスピリチュアリティが高等教育の方向性と教育現場における学びの場の文化を形成している。スピリチュアリティの問題は、多様な分野における理論的發展とも深く関わり、高等教育における文化形成とも密接につながっているのである。変動する社会の中で、大学もまた変革を余儀なくされている。大学の今後の文化形成について考える過程において心にとめておくべき問題として、本稿にてスピリチュアリティの問題を取り上げてみた。

参考文献

Bauer, Henry H., *Science or Pseudoscience: Magnetic Healing, Psychic Phenomena, and Other*

- Heterodoxies*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2001.
- Bischetti, Diane, 'Service, spirituality, and social change', in Outcalt, Charles L., Shannon K. Faris and Kathleen N. McMahon (eds.), *Developing Non Hierarchical Leadership on Campus: Case Studies and Best Practices in Higher Education*. London: Greenwood Press, 2001, 129-138.
- Capra, Fritjof, *The Tao of Physics: An Exploration of the Parallels between Modern Physics and Eastern Mysticism 25th Anniversary Edition, Fourth Edition, Updated*. Boston: Shambhala, 2000.
- Capra, Fritjof, *The Web of Life: A New Scientific Understanding of Living Systems*. The United States: Anchor Books, 1997.
- Capra, Fritjof, *The Turning Point: Science, Society, and the Rising Culture*. Toronto, New York, London, Sydney, Auckland: Bantam Books, 1982.
- Center for Consciousness Studies, The University of Arizona, Retrieved May 20th, 2008, <http://www.consciousness.arizona.edu/tucson2006.htm>
- Collins, James R., J. C. Hurst and J. K. Jacobsen, 'The blind spot extended: Spirituality', *Journal of College Student Personnel*, 28(3) May (1987): 274-276.
- Easlea, Brian, 'Patriarchy, scientists, and nuclear warriors', in Ruth, Sheila (ed.), *Issues in Feminism: An Introduction to Women's Studies*. Mountain View, CA, London, Toronto: Mayfield Publishing Company, 1990, 59-71.
- Eisler, Riane, 'The Real Wealth of Nations: Transforming economics and our lives', 12th International IONS (The Institute of Noetic Sciences) Conference, *Consciousness in Action: The Science and Practice of Transformation*, Palm Springs CA, USA, Aug 8-12, 2007a.
- Eisler, Riane, *The Real Wealth of Nations: Creating a Caring Economics*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers, Inc, 2007b.
- Frankl, Viktor, *Psychotherapy and Existentialism: Selected Papers on Logotherapy*. New York: Simon and Schuster, 1967.
- Higher Education Research Institute: Graduate School of Education & Information Studies, University of California, Los Angeles (UCLA), *Spiritual Life of College Students: A National Study of College Students' Search for Meaning and Purpose*, 2004a. Retrieved February 14th, 2007, www.spirituality.ucla.edu.
- Higher Education Research Institute: Graduate School of Education & Information Studies, University of California, Los Angeles (UCLA), *Sample Survey Instrument (Entering Freshman Survey 2004), Project Reports*, 2004b, Retrieved June 3rd, 2008. http://spirituality.ucla.edu/reports/2004_CSBV_Survey_Instrument.pdf
- Higher Education Research Institute: Graduate School of Education & Information Studies, University of California, Los Angeles (UCLA), *Spirituality in Higher Education: A National Study of College*

- Students' Search for Meaning and Purpose, Recent Publications*, Retrieved May 20th, 2008, http://spirituality.ucla.edu/publications_reports/index.html
- Hill, Peter C., Kenneth I. Pargament, Ralph W. Hood, Jr., Michael E. McCullough, James P. Swyers, David B. Larson and Brian J. Zinnbauer, 'Conceptualizing religion and spirituality: Points of commonality, points of departure', *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 30(1) March (2000) : 51-77.
- Hines, Terence, *Pseudoscience and the Paranormal, Second Edition*. Amherst, New York: Prometheus Books, 2003.
- Hunter, Margaret, 'Decentering the white and male standpoints in race and ethnicity courses', in Macdonald, Amie A. and Susan Sanchez-Casal (eds.), *Twenty-first-century Feminist Classrooms: Pedagogies of Identity and Difference*. New York: Palgrave Macmillan, 2002, 251-279.
- The Institute of Noetic Sciences (IONS). Retrieved August 15th, 2007, <http://www.noetic.org/>
- Kafatos, Menas, 'From Structural Science to Integrative Science', Reception Speech at the Academy of Scientists of Romania, Bucharest, June 23, 2000.
- Kafatos, Menas and Mihai Draganescu, 'Toward an Integrative Science', Retrieved October 1st, 2007, http://www.racai.ro/~dragam/TOWARD_1.HTM
- Lather, Patti, 'Feminist perspectives on empowering research methodologies', in Holland, Janet and Maud Blair with Sue Sheldon (eds.), *Debates and Issues in Feminist Research and Pedagogy*. Clevedon, Philadelphia and Adelaide: Multilingual Matters Ltd. In association with the Open University, 1995, 292-307.
- Lather, Patti, 'Critical theory, curricular transformation and feminist mainstreaming', *Journal of Education*, 166:1 (1984): 49-62.
- Lindholm, Jennifer A. and Helen S. Astin, 'Understanding the "interior" life of faculty : How important is spirituality?', *Religion & Education*, 33(2) Spring (2006): 64-90.
- Love, Patrick and Donna Talbot, 'Defining spiritual development: A missing consideration for student affairs', *NASPA Journal*, 37(1) Fall (1999): 361-375.
- Mouer, Ross and Yoshio Sugimoto, *Constructs of Japanese Society*. London, New York: K. Paul International: New York, NY, USA: Distributed by Routledge, Chapman and Hall, 1989.
- Mouer, Ross and Yoshio Sugimoto, *Images of Japanese Society: A Study in the Social Construction of Reality*. London: K. Paul International, 1986.
- Palmer, Parker J., *To Know as We Are Known: Education as a Spiritual Journey*. San Francisco: Harper, 1993.
- Rhoads, Robert A., *Community Service and Higher Learning: Explorations of the caring self*. Albany: State University of New York Press, 1997.

- Rose, Steven, 'Brains, minds and the world', in Steven Rose (ed.), *From Brain to Consciousness? Essays on the New Science of the Mind*. London: Princeton University Press, 1999, 1-18.
- Serow, Robert C. and Julia I. Dreyden, 'Community service among college and university students: Individual and institutional relationships', *Adolescence*, 25(99) Fall (1990): 553-566.
- Tisdell, Elizabeth J., *Exploring Spirituality and Culture in Adult and Higher Education*. San Francisco: Josey-Bass, 2003.
- Wheatley, Margaret J., *Leadership and the New Science: Discovering Order in a Chaotic World, Third Edition*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers, Inc, 2006.
- Zinnbauer, Brian J., Kenneth I. Pargament and Allie B. Scott, 'The emerging meanings of religiousness and spirituality: Problems and prospects.', *Journal of Personality* 67(6) December (1999): 889-919.
- 青木やよひ 『フェミニズムとエコロジー』 新評論, 1994.
- 石川幹人・渡辺恒夫 「間奏曲 対談：ツーソン会議と東京'99」 足立自朗・渡辺恒夫・月本洋・石川幹人 編 『心とは何かー心理学と諸科学との対話ー』 北大路書房, 2001, pp.73-83.
- 上野俊哉・毛利嘉孝 『カルチュラル・スタディーズ入門』 ちくま書房, 2000.
- 奥田暁子・秋山洋子・支倉寿子 編著 『シリーズ<女・あすに生きる>18 概説フェミニズム思想史』 ミネルヴァ書房, 2003.
- 尾崎真奈美 「大学教養課程におけるスピリチュアル教育プログラムー総合的な試みを通してー」『学校メンタルヘルス』, 2005, 第8巻, pp.79-85.
- 尾崎真奈美 「教育現場におけるスピリチュアリティー」『トランスパーソナル心理学・精神医学』, 2004, 第5巻, 第1号, pp.8-14.
- 尾崎真奈美 「スピリチュアルヘルス概念について」『学校メンタルヘルス』, 2001, 第4巻, p.96.
- 葛西賢太 『『スピリチュアリティ』を使う人々ー普及の試みと標準化の試みをめぐってー』 湯浅泰雄 監修 『スピリチュアリティの現在ー宗教・倫理・心理の観点ー』 人文書院, 2003, pp.123-159.
- 島蘭進 「はじめに」 島蘭進・永見勇 監修 『スピリチュアリティといのちの未来ー危機の時代における科学と宗教ー』 人文書院, 2007, pp.7-14.
- 杉本良夫・ロス・マオア 『日本人論の方程式』 ちくま学芸文庫, 1995.
- 中央教育審議会 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/index.htm 2008年5月27日.)
- 恒松直美 「スピリチュアリティの学際的研究ー近代科学パラダイム批判とグローバル教育への示唆ー」『総合学会誌』, 2008a, 第7巻, pp.29-36.
- 恒松直美 「短期交換留学生向けインターンシップと研修ーグローバル社会における地域ネットワークと大学教育ー」『広島大学留学生センター紀要』, 2008b, 第18号, pp.1-16.
- 中川吉晴 『教育におけるスピリチュアリティ』について 安藤治・湯浅泰雄 編 『スピリチュアリティの心理学ー心の時代の学問を求めてー』 せせらぎ出版, 2007, pp.139-164.
- 中川吉晴 『ホリスティック臨床教育学ー教育・心理療法・スピリチュアリティー』 せせらぎ

出版, 2005.

中村雄二郎 『臨床の知とは何か』 岩波新書, 1992.

日本ホリスティック教育協会 編 『ホリスティック教育入門 ー復刻・増補版ー』 せせらぎ出版, 2005.

半田栄一 「モラルの教育と日本的スピリチュアリティ」『トランスパーソナル心理学/精神医学』, 2007, 第7巻, 第1号, pp.35-43.

福岡伸一 『生物と無生物のあいだ』 講談社, 2007.

松本伊瑛子・金井篤子 編 『ジェンダーを科学する ー男女共同参画社会を実現するためにー』 ナカニシヤ出版, 2004.

諸富祥彦 『むなしさの心理学 ーなぜ満たされないのか』 講談社, 1997.

安野舞子・亀田多江 「高等教育におけるスピリチュアリティ調査 ー本学での予備調査からー」 『創価女子短期大学紀要』, 2006, 第36巻, pp.23-59.

山崎英則・加藤幸夫 共編 『こころの教育の本質を学ぶ ー人間のこれからの生き方を求めてー』 学術図書出版社, 2005.

湯浅泰雄 監修 『スピリチュアリティの現在 ー宗教・倫理・心理の観点ー』 人文書院, 2003.

謝辞

2006年度広島大学学長裁量経費により、1) 'Consciousness in Action' と題した第12回 IONS 国際学会(2007年8月8-12日にアメリカの Palm Springs で開催)及び 2) 第10回 International Conference on Science and Consciousness (2008年3月28日-4月3日にアメリカの Santa Fe にて開催)への参加が可能となった。本稿にて広島大学学長への感謝の意を表させていただきたい。